

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：35410

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02578

研究課題名（和文）「現実性/虚構性」表出の語りの技法研究：フォークナーの符号表現実証分析を起点に

研究課題名（英文）A Study of Narrative Techniques for Representing Reality/Fictitiousness: Based on an Empirical Analysis of Faulkner's Expressive Use of Punctuation Signs

研究代表者

重迫 和美 (Shigesako, Kazumi)

比治山大学・現代文化学部・教授

研究者番号：00279085

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：モダニズム文学の代表ウィリアム・フォークナーの実験的語りの技法は、これまでも多く研究されてきた。しかし、従来のナラトロジーに代表される分析手法が不十分なため、十分に説明できない奇妙な語りの現象が残され、後期作品の語りの技法の実験が見過ごされていた。本研究は、最新のナラトロジーや認知言語学を参照して語りの技法の新しい分析手法を確立し、フォークナーの奇妙な語りの現象を解明した上で、前期は描出の「現実らしさ」を後期は「虚構らしさ」を強調する技法を彼が工夫していることを明らかにした。さらに、本分析手法をフォークナー小説以外の物語に適用し、異メディアに渡る日米物語の物語構造の比較対照研究への道を開いた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、第一に、フォークナーの語りの技法研究として、これまで説明できなかった彼の奇妙な語りの現象を明らかにし、これまで見過ごされていた彼の後期作品の語りの技法の実験的意義を明らかにしたことである。第二に、ナラトロジー研究に関与する意義として、従来のナラトロジーが分析できなかったフォークナーの複雑な語りの技法を分析する手法を確立した。第三に、比較文学研究として、本研究者の分析手法をフォークナー小説以外の物語作品に適用し、日米の異ジャンルに渡る物語の物語構造を比較する研究への道筋をつけた。最後に、本分析手法が多様な物語に適用できる汎用性を持つ点で、本研究は社会的意義をも持つと言える。

研究成果の概要（英文）：William Faulkner, a representative of modernist literature, is widely recognized for his experimental narrative techniques, which have been extensively researched. However, due to inadequate analytic methods represented by conventional narratology, there remain some strange narrative phenomena that cannot be fully elucidated, and the experiments with narrative techniques in his later works have been overlooked. This study establishes a new method for analyzing narrative techniques with reference to the latest in narratology and cognitive linguistics, clarifies Faulkner's strange narrative phenomena, and reveals that he devised techniques that emphasize "reality" of representation in his earlier works and "fictitiousness" in his later works. Furthermore, by applying this analytic method to narratives other than Faulkner's novels, this study opens the way for a comparison and contrast study of the narrative structure of Japanese and American narratives across different media.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：ウィリアム・フォークナー 語りの技法 物語の現実性と虚構性 物語構造分析

1. 研究開始当初の背景

本研究者は、本研究を開始する以前までに、ウィリアム・フォークナー作品の語りの技法を当時最も用いられていたジェラルド・ジュネットの物語論(ナラトロジー)の手法によって分析し、フォークナーを様々な実験的語りの技法に導いた問題意識が虚構物語の「現実性/虚構性」という問題に帰着すること、彼の作品の物語構造の変化が、古典的リアリズム、モダニズム、ポスト・モダニズムに渡る小説の物語構造の変化の縮図モデルを提供してくれることを明らかにしていた。また、フォークナーの語りの技法研究の発展として、彼の語りの技法と映画の語りの技法との関係や、彼の語りの技法とアメリカの作家や日本の作家の語りの技法との影響関係についての研究にも取り掛かっていた。このようにフォークナーを中心に様々な物語の構造を比較・対照する研究を継続する中で、本研究者は、時代に応じて変化してきたフォークナーの語りの技法が時代・メディア・文化(日米)を横断する物語の構造を比較・対照する基準になり得るとの着想を得た。そこで、異メディアに渡る日米物語作品の物語構造比較文学史を構想するという最終的な研究目標を設定した。

研究開始当初、異なるメディアの日米物語作品の物語構造を年代ごとに比較・対照するという先行研究は見当たらなかった。欧米言語圏では、ミメシスという「現実性/虚構性」の問題に直結する創作理念が言語・言語芸術においてどのように作用しているかの研究は既に多くあったし、古典的リアリズムからモダニズムを経てポスト・モダニズムに至るまでの物語の構造研究もかなり行われていた(エーリッヒ・アウエルバッハの『ミメシス』(1946)、ウェイン C.ブーアの『フィクションの修辞学』(1961)、ジェラルド・ジュネットの『ミモロジック』(1976)、パトリシア・ウォーの『メタフィクション』(1984)など多数)。メディアを横断する物語の構造研究も欧米の物語論研究の分野において1990年代から注目されるようになっていた。ジュネットら物語論第一世代の研究者は主に小説を分析対象としたが、90年代は、学術誌『物語』の創刊(1993)が示唆するように、一時下火になっていた物語論研究が活性化し、デヴィッド・ハーマン(『ストーリー・ロジック』(2002)など)やモニカ・フルーダニク(『「ナチュラル」ナラトロジーに向けて』(1996)など)らポスト物語論を自称する第二世代の物語論者たちが現れて、物語論は小説以外のメディアの物語を積極的に分析対象とするようになっていた(デヴィッド・ハーマン編『ナラトロジー』(1999)参照)。しかし、それらの知見をもって日本の物語を欧米の物語と比較・対照しようとする本格的な試みは、本研究者の知る限り、欧米言語圏物語論研究では行われていなかった。

日本国内では、ジュネットの物語論が日本に紹介され始めた1980年代から日本語小説にジュネットら欧米系物語論の分析手法を適用する試みが始まった(小森陽一『構造としての語り』(1988)など)。以降、本研究開始当初に至るまで、ジュネットの物語論以外にも欧米系物語論の刺激を受けつつ、日本語小説の構造分析研究は脈々と行われ(小森陽一『構造としての語り・増補版』(2017)など)、物語論はアニメやゲームなど異なるメディアの物語の構造分析にも援用されるようになっていた(高田明典『物語構造分析の理論と技法:CM・アニメ・コミック分析を例として』(2010)、橋本陽介『物語論 基礎と応用』(2017)など)。また、日本国内では、日本の研究者独自の物語論が1980年代に早くも胎動し(亀井秀雄『感性の変革』(1983)など)本研究開始当初に至るまで継続していた(藤井貞和『物語理論講義』(2004)など)。物語論は言語学をモデルとしている。文法体系などの点で欧米言語とは著しく異なる日本語という言語は日本文学研究者を日本独自の物語論へと誘ったと言える。このように、本研究開始当初、日本国内には時代やメディアを横断した物語の物語構造研究が活発に行われていた。しかし、問題点として、多くの研究が作品論であって比較・対照の観点に乏しく、特に日米両方の物語の物語構造を比較・対照する観点が欠けていた。

2. 研究の目的

本研究者の最終目標は、虚構物語作品において描出の「現実性(現実らしさ)」と「虚構性(虚構らしさ)」を実現する語りの技法を、ウィリアム・フォークナーを基準に、日米異ジャンルに渡る物語作品について比較・対照し、虚構物語の物語構造比較文学史を構築することである。この最終目標を達成するため、本研究では四つの具体的目的を掲げた。

第一に、フォークナーの語りの技法の時代による変化を明らかにするために、フォークナー作品の引用符などの符号表現の意味用法を明らかにすることを具体的な研究目的とした。フォークナーがイタリックという言語以外の表現にテキスト解釈上重要な意味を持たせて使用した点はよく研究されているが、引用符やダッシュなどの符号表現は注目されてこなかった。しかし、本研究者は、本研究開始当初までに、フォークナーが引用符やダッシュなどの符号表現に物語構造上重要な意味を持たせていたことを明らかにしており、これらの符号表現の意味用法の確定が、彼の後期作品の物語構造を検討する上での重要な鍵になると考えていた。

第二に、フォークナーの戯曲様式の作品におけるセリフ外言語表現(ト書きなど)の意味用法を明らかにすることを具体的な研究目的とした。フォークナーの後期代表作『尼僧への鎮魂歌』(1951)の半分は戯曲様式で書かれている。ト書き部分は、テキスト解釈上検討の対象とされてこなかったが、本研究者はト書き部分に物語構造上の意味があるとの仮説を持っていた。この仮説

が正しいか否かは、フォークナーの語りの技法の時代による変化を明らかにしようとする本研究の方向を左右する。そこで、この仮説の正しさを立証する必要があった。

第三に、フォークナーの「多重物語」について、物語の出来事の描出に「現実性／虚構性」を与える語りの技法を究明することを具体的な研究目的とした。ここで言う「多重物語」とは入れ子式構造を持つ物語のことである。一番外側にあり、それ自体は別の物語に埋め込まれない物語を「枠物語」、別の物語に埋め込まれるのが「枠内物語」とすれば、理論上は、物語で起こる出来事が枠内物語に置かれるよりも枠物語に置かれる方が、当該出来事の現実性が高いと考えられる。枠物語に登場する作中人物が生産する枠内物語は虚実混交となるが、枠物語は作中人物が生産に関与しないからだ。しかし実際には、「枠物語＝現実＞枠内物語＝虚構」という図式が全ての虚構物語に当てはまるわけではない。本研究開始当初、本研究者は、時代や文化により、それぞれの典型的図式が見い出せると考えており、さらにその図式を作る基準をフォークナーの語りの技法に求めることができると考えていた。

最後の具体的な目的として、ジョン・バース、筒井康隆などの日米小説や小説以外の異なるメディアによる多重物語について、物語の出来事の描出に「現実性／虚構性」を与える語りの技法を検討し、時代・メディア・文化横断的に比較考察することを掲げた。バースも筒井もポストモダンニズム文学を代表する作家であり、時代ごとの日米小説の物語構造の典型を探る良い資料である上に、バースには『キマイラ』(1972)、筒井には『朝のガスパール』(1992)という多重物語があった。異メディアの多重物語としては、萩尾望都のマンガ『バルバラ異界』(2002-2005)、日本の特撮『仮面ライダーディケイド』(2009)、日本のアニメ『魔法少女まどか☆マギカ』(2011)を取り上げる計画とした。また、時間が許す限り様々な多重物語を分析することを目指した。

3. 研究の方法

本研究の具体的な目的「フォークナー作品の引用符などの符号表現の意味用法を明らかにすること」と「フォークナーの戯曲様式の作品におけるト書きなどのセリフ外言語表現の意味用法を明らかにすること」を達成するための方法として、サウスイーストミズーリ州立大学フォークナー研究センターに赴き、フォークナー関連資料の調査・収集を行った。符号表現もセリフ外言語表現も従来の研究では注目されてこなかったため、定本とされるテキストにおいてさえフォークナーの意図通りに表現されているかが疑問であり、手書原稿やタイプ原稿と定本テキストとの照合を行う必要があった。同研究センターは、初版を含む異なる版の定本テキストの他にも、フォークナーの手書原稿、タイプ原稿、映画脚本など、貴重な資料を所有しており、本研究の照合作業に理想的な環境を与えてくれた。

本研究の第三の具体的な目的（フォークナーの「多重物語」について、物語の出来事の描出に「現実性／虚構性」を与える語りの技法を究明すること）を達成するための方法として、フォークナーの全作品を視野に入れ、作品の描出の「現実性」と「虚構性」を比較できるような分析手法を最新の物語論や日米の認知言語学を参照して確立した。この手法によって、従来のフォークナー研究が物語論では分析できないとしていた奇妙な語りの現象を分析できるようになり、前期の技法は物語の出来事の現実性を、後期は虚構性を表現する傾向があることを明らかにした。

最後の具体的な目的（ジョン・バース、筒井康隆などの日米小説や小説以外の異なるメディアによる多重物語について、出来事の描出に「現実性／虚構性」を与える語りの技法を検討し、時代・メディア・文化横断的に比較考察すること）を達成する方法として、まず、バースの『キマイラ』、筒井の『朝のガスパール』、萩尾の『バルバラ異界』、特撮『仮面ライダーディケイド』やアニメ『魔法少女まどか☆マギカ』を対象に試験的に構造分析を行い、時代、メディア、文化の傾向を見ることにした。

4. 研究成果

本研究は当初 3 年間で完了の予定だった。しかし新型コロナウイルス感染拡大防止のため最終年度に計画していた国際研究会を延期した結果、研究開始から 6 年目に完了することとなった。各年度に得られた研究成果は以下のとおりである。

1 年目の平成 29 年度 (2017 年度) に、サウスイーストミズーリ州立大学フォークナー研究センターで、フォークナー後期代表作の『寓話』(1954) 関連資料を中心に資料調査と収集を行った。収集資料を基に、フォークナーの符号表現の意味用法の究明と、虚構物語に「現実性／虚構性」を与えるフォークナーの語りの技法の究明に取り組み、その成果を二本の研究論文(『*The Sound and the Fury* の Quentin の内面描写における引用符の意味—『大いなる夢よ、光よ』の章子の内面描写を参照して—』、『*A Fable* における Faulkner の語りの技法—第 6 章の特異な三人称の語り手—』)で公表した。前者の論文では、収集した資料に発見できたフォークナーの校正跡を根拠として引用符をフォークナーが意識的に使い分けていることを示した。引用符の意味用法に従来の研究は注目してこなかった。しかしフォークナーが引用符を明確に使い分けていることが確定できれば、例えば、フォークナー作品の一部のみで作中人物のセリフが二重引用符でなく一重引用符でくくられていることに物語構造上の重要な意味があると理解できる。引用符はフォークナー研究の新しい分析の切り口となり得る。後者の論文は、まず、フォークナーがダッシュや丸括弧に物語構造上の意味を持たせていることを、すなわち、フォークナーがダッシュや丸括弧によって、枠物語を枠内物語へと転換し、枠物語で起こる現実であるはずの出来事を枠内物語で起こる虚構の出来事に転換していることを論じている。またそれとは逆に、フォー

クナーは、作中人物が語っているはずの出来事を語る特異な三人称の語り手を創出して、枠内物語で起こる虚構の出来事を枠物語で起こる現実の出来事に転換している。これらの技法は、従来のフォークナー研究が見過ぎてきたものであり、本論文は語りの技法の実験性が認知されてこなかったフォークナー後期作品が今後研究されるべきであることを示したと言える。

2年目の平成30年度(2018年度)には、6月にサウスイーストミズーリ州立大学フォークナー研究センター所長クリストファー・リーガー教授を招聘して「ウィリアム・フォークナーと三島由紀夫」と題する国際研究会を主宰した。氏の発表はフォークナーと三島において自然とジェンダー表象が性と死のテーマとどのように関わっているかを比較考察するもので、本研究者がフォークナーと三島の語りの技法比較を行う参考となった。本発表は本研究者の翻訳によって「自然とジェンダー、性と死—フォークナーと三島由紀夫—」として日本フォークナー協会誌『フォークナー』21号で公表され、さらに『フォークナーと日本文学』(2019)にも収録された。

当該年度のサウスイーストミズーリ州立大学フォークナー研究センターでのフォークナー関連資料の調査と収集はフォークナー後期代表作の『尼僧への鎮魂歌』関連資料を中心に行った。収集資料を基に、フォークナー作品におけるト書きなどのセリフ外言語表現の意味用法の究明、物語の出来事の描出に「現実性／虚構性」を与えるフォークナーの語りの技法の究明、フォークナー以外の多重物語作品の構造分析に取り組んだ。その成果として、まず、ト書き部分にも、符号表現同様に、フォークナー独自の用法があるとの観察を得た。次に、物語の「現実性／虚構性」に関わる「脱神話化作用」というテーマを持つ『寓話』を検討し、成果を論文『『寓話』における脱神話化作用—『寓話』の伍長物語における『新約聖書』『福音書』のイエス物語の変形—』で公表した。「脱神話化作用」とは、神話という物語の虚構性を暴露する作用を意味する。本作では、枠物語を枠内物語化する技法が脱神話化作用を有効に描き出している。最後に、三島作品、仮面ライダーシリーズなどの多様な日本の多重物語作品を検討した。成果として、フォークナー小説を含むアメリカの多重物語は入れ子式になる傾向が、三島小説を含む日本の多重物語は入れ子式にならない傾向があるという観察を得た。このように、公表した成果以外にも、当該年度は重要な観察を多く得た。それらについては本研究終了後も研究を継続し公表する計画である。

3年目の令和元年度(2019年度)のサウスイーストミズーリ州立大学フォークナー研究センターでの調査では、『尼僧への鎮魂歌』以外にも、映画脚本、演劇脚本、雑誌掲載短編など、未刊行資料を多数収集した。これらの資料を参考に、描出の「現実性／虚構性」という観点からフォークナーの語りの技法の時代による変化を明らかにし、また、彼の多重物語と多様な多重物語とを比較・対照する課題に取り組んだ。成果として、まず、フォークナー初期には語り手を潜在化する技法で枠内物語が際立つ傾向が、後期には語り手を顕在化する技法で事後的に枠物語が生じる傾向があるという観察を得た。物語の時空は、前者では語られずとも眼前にある現実として読者に迫り、後者では語られることで初めて生まれる虚構として読者に把握される。前者の技法は物語の出来事の現実性を、後者の技法は虚構性を表現していると言える。本成果のうち、後期作品『尼僧への鎮魂歌』に関わる部分を、まず6月に「*Requiem for a Nun*におけるFaulknerの特異な語り手」と題して中・四国アメリカ文学会第48回大会で発表した。次に、8月下旬から9月上旬に行ったフォークナー研究センターでの調査を踏まえて本発表をさらに発展・深化させ、10月の日本アメリカ文学会第58回全国大会で「William Faulknerの語りの技法—*Requiem for a Nun*における特異な三人称の語り手—」と題して発表した。二つの発表はそれぞれ論文(「*Requiem for a Nun*の語り手の特異性—短編“A Name for the City”との比較検討から—」, 「*Requiem for a Nun*の語り手の特異性—Faulknerの引用符と時制の用法が明らかにすること—」)として公表した。『尼僧への鎮魂歌』の語り手について、従来のフォークナー研究は、三人称の語り手と作中人物の、相反する特徴を兼ね備える特異性を持つと説明してきたが、本研究者は、両論文で本作の語り手は三人称の語り手に見える作中人物であると主張している。前者の論文は枠物語の潜在化の観点から、後者の論文は引用符と時制の用法の観点から、本研究者の主張を論じるものである。

当該年度は、当初計画では本研究の最終年度になるはずだった。前年度までのフォークナーの語りの技法研究によって、日米異ジャンルに渡る物語作品について描出の「現実性」と「虚構性」を比較・対照できる分析手法の構想を得ていたので、その手法によりフォークナー小説と日本の小説の物語構造を比較する試論を公表し、アメリカと日本国内のフォークナー研究者から評価を得たいと考え、国際研究会(「Faulkner2020」)を3月に計画していた。しかし、新型コロナウイルス感染拡大のため研究会を延期し、完了を翌年度に持ち越すことになった。

4年目の令和2年度(2020年度)は、前年度に国際研究会で公表するはずだった内容を改善し、当該年度の国際研究会でより良い形で公表することを目指した。まず、物語構造の分析手法の再検討に取り組み、成果として新しい分析手法を提案できた。本分析手法の特徴は物語の現実性と虚構性を評価する観点を「聞き手」という機能主体を起点に二つ設定した点である。聞き手は語り手の言述を介して物語世界の事態を認知する機能主体である。現実性と虚構性を評価する観点の一つは、聞き手の物語世界に対する位置であり、語り手が描出する物語世界は聞き手にとって端的に虚構の価値を持ち、聞き手が語り手の言述を受け取る物語世界の外の領域は聞き手にとって端的に現実の価値を持つと考える。もう一つの観点は、物語世界内で生起する出来事を聞き手が認知・把握する際の聞き手の事態把握モードである。事態把握は三つの典型的モード—臨場する当事者のように体験的に事態を把握する「主観的把握」、主観的に事態を把握する自分を対象化して事態を把握する「対自主観的把握」、傍観者、観察者のように客観的に事態を把

握する「客観的把握」——を想定できる。聞き手にとっての物語世界の現実性は、「主観的」「対自主観的」「客観的」の順に高い。これら二つの観点を組み合わせて、語りの技法がどのように物語の出来事の現実性と虚構性を制御するかを独自の物語構造分析モデルに図示した。本分析手法によるフォークナー中期作品『アブサロム、アブサロム!』(1936)の分析は論文「現実らしさと虚構らしさを描出する Faulkner の語りの技法(1)—*Absalom, Absalom!* 第8章における虚構の現実らしさの分析を中心に—」として、後期作品『尼僧への鎮魂歌』の分析は中・四国アメリカ文学会冬季研究会の「現実らしさと虚構らしさを描出する Faulkner の語りの技法—*Requiem for a Nun*における現実世界の虚構らしさの分析を中心に—」の研究発表として公表した後、加筆修正して論文「現実らしさと虚構らしさを描出する Faulkner の語りの技法(2)—*Requiem for a Nun*における現実世界の虚構らしさの分析—」で公表した。これらの業績で、本研究者は、従来の物語論の手法では説明できなかったフォークナーの奇妙な語りの現象を解明してみせた。さらに、これらの奇妙な語りの現象の解明を通して、フォークナーが前期においては現実性を、後期において虚構性を強調する語りの技法の実験を行っていることを示した。

当該年度の3月には、新しく考案した分析手法でそれまでに検討してきた物語を再検討して、前年度に開催予定だった国際研究会を開催すべく準備をしていたが、新型コロナウイルスが依然猛威を振るっていたため、国際研究会を再度延期とした。

5年目の令和3年度(2021年度)は、前年度に開催予定だった国際研究会を、公表する内容を一層充実させて実施することを目指し、前年度に考案した分析手法をフォークナー小説と日本の小説の両方に適用してフォークナーと日本の小説物語を比較・対照する試みを行った。当該年度のフォークナー小説に関する研究成果は9月の関西フォークナー研究会で研究発表「現実／虚構世界」の「虚構／現実らしさ」を描出する Faulkner の語りの技法—*Requiem for a Nun*の物語構造分析を手がかりに—として公表した。本研究発表は、前年度に提案した独自の分析手法により『アブサロム、アブサロム!』、『野生の棕櫚』(1939)、『尼僧への鎮魂歌』を改めて分析した上で、前期から後期に至るフォークナー小説の物語構造を比較・対照したものである。当該年度のフォークナーと日本の小説物語の比較・対照研究の成果は、論文「虚構世界の現実らしさを描出する語りの技法—William Faulkner と泉鏡花における「特異な」語り手—」で公表した。鏡花の「眉かくしの霊」(1924)が、フォークナーの『尼僧への鎮魂歌』同様、枠物語の潜在化によって聞き手を作中人物の声を直接聞く位置に置くこと、また、『アブサロム、アブサロム!』同様、作中人物に主観的把握モードで語らせる技法によって聞き手を物語世界の現場に臨場する位置に立たせることを明らかにした。延期していた国際研究会は、当該年度の3月実施を検討したが、新型コロナウイルスの感染状況が改善しないため延期とした。

6年目の令和4年度(2022年度)に本研究は完了した。これまでの研究成果を二つの国内学会で発表して評価を得、研究の完成度を高める作業に取り組み、国際研究会(Faulkner 2023)で総括した。中・四国アメリカ文学会第50回大会では、「虚構世界の現実らしさを描出する語りの技法—William Faulkner の *Absalom, Absalom!* と三島由紀夫の『春の雪』の比較考察」と題して成果を公表した。独自の物語構造モデルによる分析手法により三島由紀夫の『春の雪』(1969)を分析し、作中人物の回想や想像という虚構世界を現実らしく描出する語りの技法として「二重の時制の基準移動」と「二重の主観的事態把握」を指摘した。さらに、三島の技法を参照することにより、フォークナーの『アブサロム、アブサロム!』においても「二重の時制の基準移動」と「二重の主観的事態把握」という虚構世界を現実らしく見せる語りの技法が見られることを指摘した。本研究発表は、加筆修正後、論文「虚構世界の現実らしさを描出する語りの技法—William Faulkner の *Absalom, Absalom!* と三島由紀夫の『春の雪』の比較考察」として公表した。日本アメリカ文学会第61回全国大会では「Faulkner と日本文学の語りの技法比較—William Faulkner, 泉鏡花, 三島由紀夫における虚構世界の現実らしさを描出する語り—」と題して成果を公表した。本発表は、前年度に研究した泉鏡花の「眉隠しの霊」と当該年度に研究した三島由紀夫の『春の雪』の両方を参照して、フォークナーの『アブサロム、アブサロム!』の第8章と第9章における、虚構世界の現実らしさを描出する語りの技法を論じたものである。独自の物語構造モデルの分析により、「眉隠しの霊」と『アブサロム、アブサロム!』第8章では作中人物の主観的把握と二度の時制の基準移動によって、『春の雪』と『アブサロム、アブサロム!』第9章では語り手の二重の主観的把握と二重の時制の基準の移動によって、虚構世界が現実らしく描かれていることを明らかにした。国際研究会では、「現実性／虚構性」表出の語りの技法研究—William Faulkner の語りの技法を基準にして」と題して本研究を総括した。第一の成果として、フォークナーが前期は虚構の現実性を後期は現実の虚構性を強調する語りの技法を工夫していることを明らかにした。従来の研究が実験的でないとして注目してこなかった後期作品の語りの実験を明らかにできた意義は大きい。第二の成果として、物語作品内の「虚構世界の現実らしさ」と「現実世界の虚構らしさ」を分析する独自の分析手法を確立した。この手法によって、従来の物語論で分析できないとされてきたフォークナーの複雑な語りの技法を十分に分析できるようになった。この点は、一般的物語論研究上の意義でもある。第三の成果として、独自の分析手法が「現実性／虚構性」表出の語りの技法の観点から、フォークナーの小説以外の多様な物語作品をフォークナーと比較・対照することを可能にした。「現実性／虚構性」の表出を鍵に、映画と小説の比較・対照や日米文学の比較・対照など、メディアや言語の異なる物語の物語構造比較・対照が可能となることから、本研究には比較文学・文化研究上の意義もある。以上の成果を上げた本研究は発展可能性が高いので、本研究完了後も継続して研究されなければならない。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 重迫和美	4. 巻 29
2. 論文標題 虚構世界の現実らしさを描出する語りの技法 William FaulknerのAbsalom, Absalom!と三島由紀夫の『春の雪』の比較考察	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 比治山大学紀要	6. 最初と最後の頁 47-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 重迫和美	4. 巻 28
2. 論文標題 虚構世界の現実らしさを描出する語りの技法--William Faulknerと泉鏡花における「特異な」語り手--	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 比治山大学紀要	6. 最初と最後の頁 31-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 重迫和美	4. 巻 27
2. 論文標題 現実らしさと虚構らしさを描出するFaulknerの語りの技法（1） Absalom, Absalom! 第8章における虚構の現実らしさの分析を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 比治山大学紀要	6. 最初と最後の頁 43-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 重迫和美	4. 巻 7
2. 論文標題 現実らしさと虚構らしさを描出するFaulknerの語りの技法(2) Requiem for a Nunにおける現実世界の虚構らしさの分析	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 重迫和美	4. 巻 26
2. 論文標題 Requiem for a Nunの語り手の特異性－短編“A Name for the City”との比較検討から－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 比治山大学紀要	6. 最初と最後の頁 85-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 重迫和美	4. 巻 6
2. 論文標題 Requiem for a Nunの語り手の特異性－Faulknerの引用符と時制の用法が明らかにすること－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究	6. 最初と最後の頁 88-97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 重迫和美	4. 巻 第25号
2. 論文標題 『寓話』における脱神話化作用－『寓話』の伍長物語における『新約聖書』『福音書』のイエス物語の変形－	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 比治山大学紀要	6. 最初と最後の頁 61-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 重迫和美	4. 巻 第24号
2. 論文標題 A Fable におけるFaulknerの語り手の技法－第6章の特異な三人称の語り手－	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 比治山大学紀要	6. 最初と最後の頁 45-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 重迫和美	4. 巻 第4号
2. 論文標題 The Sound and the FuryのQuentinの内面描写における引用符の意味－『大いなる夢よ、光よ』の章子の内面描写を参照して－	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 比治山大学・短期大学部教職課程研究	6. 最初と最後の頁 234-246
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 重迫和美
2. 発表標題 Faulknerと日本文学の語りの技法比較－William Faulkner, 泉鏡花, 三島由紀夫における虚構世界の現実らしさを描出する語り－
3. 学会等名 日本アメリカ文学会 第61回 全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 重迫和美
2. 発表標題 虚構世界の現実らしさを描出する語りの技法－William FaulknerのAbsalom, Absalom!と三島由紀夫の『春の雪』の比較考察
3. 学会等名 中・四国アメリカ文学会 第50回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 重迫和美
2. 発表標題 「現実/虚構世界」の「虚構/現実らしさ」を描出するFaulknerの語りの技法-Requiem for a Nunの物語構造分析を手がかりに-
3. 学会等名 関西フォークナー研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 重迫和美
2. 発表標題 現実らしさと虚構らしさを描出するFaulknerの語りの技法－Requiem for a Nunにおける現実世界の虚構らしさの分析を中心に－
3. 学会等名 中・四国アメリカ文学会 冬季研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 重迫和美
2. 発表標題 Requiem for a NunにおけるFaulknerの特異な語り手
3. 学会等名 中・四国アメリカ文学会 第48回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 重迫和美
2. 発表標題 William Faulknerの語りの技法－Requiem for a Nunにおける特異な三人称の語り手－
3. 学会等名 日本アメリカ文学会 第58回全国大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 諏訪部浩一+日本ウィリアム・フォークナー協会編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 松柏社	5. 総ページ数 448
3. 書名 フォークナーと日本文学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 Faulkner 2023—Faulkner研究のこれから	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 比治山大学現代文化学部言語文化学科特別セミナー「ウィリアム・フォークナーと三島由紀夫」	開催年 2018年～2018年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------